

令和6年6月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

武蔵御嶽神社大鳥居前「大麻止乃豆乃天神社」碑

武蔵御嶽神社にはいくつかの鳥居がありますが、頂上の神社へと続く石段のはじまりに建つものは特に「大鳥居」と呼ばれます。平成十七年酉年式年大祭事業の際に建て替えられた大鳥居は、境域林より伐り出された御神木により造られています。この大鳥居は「聖」と「俗」との境にあり、御神域への出入口を示しているため、参拝者は付近の手水舎にて心身を清め、石段を登ります。

大鳥居に向かって右側には、彫刻家の北村西望きたむらせいぼうにより「武蔵御嶽神社」と揮毫された大きな社号碑が建ちます。一方左側には、あまり目立ちませんが「大麻止乃豆乃天神社」おおまとのつのあまつかみやしろと刻まれた石碑があります。

(表面)

大麻止乃豆乃天神社

(裏面 右下)

神祇道唯受一人

吉川四方進源従五

「大麻止乃豆乃天神社」とは、平安時代に編纂された「延喜式」えんぎしきという法律の施行細則が記された書物にみえる神社名です。延喜式の第9巻は「神名帳」じんみょうちょうとよばれ、朝廷が陰暦2月の祈年祭にて幣帛へいはくをたてまつる全国五畿七道の2,861社3,132座の神社名が記載されています。現在の東京都・埼玉県・神奈川県の一部にあたる武蔵国は44座が記され、この内の多磨(摩)郡には阿伎留神社、小野神社、布多天神社、大麻止乃豆乃天神社、阿豆佐味天神社、穴沢天神社、虎柏神社、青渭神社の8座が記されています。延喜式神名帳に記載された神社は「式内社」しきないしゃとも呼ばれています。

式内社は古来大切にされてきましたが、時勢の推移や神社の衰微等により、この事跡が消滅して所在不明となる場合があります。このため伝説や口碑によって式内社と称する場合があります、同一の式内社と称する神社が二社以上存在し、この何れが該当するのかが諸説一定しないものがあります。大麻止乃豆乃天神社についても、都内複数の神社が自己の神社がこの神社であると主張していますが、武蔵御嶽神社もこの内の一社です。

石碑裏面には揮毫した吉川よしかわ従五よりうむの名前があります。吉川従五は吉川神道を継承した人物です。吉川神道は江戸時代前期の神道家吉川よしかわ惟足これたりが創始しました。吉川惟足は江戸日本橋の商人でしたが、吉田神道の実力者である萩原はぎわら兼従かねよりの下で神道や和歌を学び、徐々に頭角をあらわしました。吉川惟足は江戸で神道家として地歩ちほを固め、幕府の重臣つがるのぶまさや津軽信政らの有力大名の信任を得ました。ついには將軍補佐役会津藩主・保科ほしな正之まさゆきの後援を受け、寺社奉行配下の神道方に就任し、幕臣に列せられました。吉川惟足のあとは子の吉川よしかわ従長これながが継ぎ、神道説が体系化され、吉川神道は展開・発展を遂げていきました。

吉川従五は養嗣子ようししですが吉川神道の「四重奥秘」なる秘伝を継承したようです。肩書きに「神祇道唯受一人」とあるのは、吉川神道を継承する唯一の者という意味と思われます。歴代の継承者は書簡や文書に自分の氏名とともにこの肩書を用いました。会津藩8代藩主松平容敬まつだいらかたかは天保凶荒を中心とした藩政の危機に立ち向かった人物ですが、吉川従五から吉川神道の四重奥秘を受けていました。また幕末に「御嶽菅笠」を記した齋藤義彦は、吉川従五の手代官でありました。

神道に関する知識が豊富であった齋藤義彦には、武蔵国内の式内社44座について記した書物があります。齋藤義彦が武州御嶽山に登山したきっかけは式内社を巡る旅が目的だったのででしょうか。この石碑の縁を結んだのは齋藤義彦であった可能性があります。寺社奉行配下の神道方の揮毫による石碑の存在は、武州御嶽山が大麻止乃豆乃天神社であることを強く主張しているようです。



| | |
|------------------------------|--------|
| 「大麻止乃豆乃天神社」碑 | |
| 幅 | 45 cm |
| 高さ | 138 cm |
| ※2段台座にのる。高さ 各38 cmと27 cm。 | |
| 表面文字幅 | 18 cm |
| 高さ | 112 cm |
| 裏面文字幅 | 9 cm |
| 高さ | 33 cm |

参考文献 平重宗「吉川神道の基礎的研究」
河野省三「幕末の神道家齋藤義彦」

(文責 黒田 耕)